スルタン・フセインおよびトゥムンゴンとの合意

Dr Alexander Ressos, TEP
Attorney-at-Law (Switzerland and Germany),
Solicitor (England & Wales and Hong Kong)
Of Counsel, KGP Legal LLC
alexander.ressos@kgplegal.com.sg
www.ressos.com.sg

上陸と予備協定

ラッフルズの遠征隊は1819年1月28日にセント・ジョンズ島に上陸し、翌日シンガポール川に到着しました。[1]河口でラッフルズが見出したのは、トゥムンゴン・アブドゥル・ラーマンが率いるマレー人の集落でした。住民は約150人で、その大半はマレー人、約30人が中国人でした。[2]1819年1月30日、ラッフルズとトゥムンゴンは予備協定に署名しました。[3]

トゥムンゴンはイギリスとの取引に前向きでしたが、単独で島に関する権利を譲渡する権限を持っていませんでした。ジョホール・リアウ・スルタン国の国制上、そのような付与にはスルタンが必要だったのです。承認されていたスルタンであるアブドゥル・ラーマンは、ブギス人とオランダの影響下にあるリアウに居住しており、イギリスとの条約に署名するはずもありませんでした。ラッフルズには、自前のスルタンが必要でした。

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

スルタンの承認

彼が見出したのは、先代スルタンの長男トゥンク・フセインでした。フセインは1812年以後の王位継承争いで退けられ、リアウ諸島で暮らしていました。フセインはシンガポールに迎えられ、イギリスの承認の下でジョホールのスルタンとして即位しました。[4]この承認の法的根拠は、当初から争われました。オランダはアブドゥル・ラーマンを正統なスルタンとみなし、フセインをイギリスの傀儡と見ました。イギリスは、長男であるフセインの方が正当な継承権を持ち、継承はブギス人とオランダの圧力の下で決められたものだと主張しました。

法律家の目から見ると、この出来事は国際ビジネスで繰り返し現れる問題の初期の例です。すなわち、主権者や会社を拘束する権限を誰が持っているかという問題です。権限のない者が署名した契約は無価値ですから、相手方のデューデリジェンスは署名者の国制上の地位にまで及ばなければなりません。ラッフルズは、一応の根拠ある請求権を持つ署名者を承認することでこの問題を解決しました。オランダがこの解決策を拒否した後、結果として生じた紛争は、5年後にヨーロッパ列強間の条約によって決着しました。

1819年2月6日の条約

1819年2月6日の条約は、ラッフルズが代表する東インド会社と、スルタン・フセインおよびトゥムンゴン・アブドゥル・ラーマンとの間で締結されました。条約は英語とマレー語で並記して作成されました。[5]中心となる規定は、スルタンの世襲領のいかなる場所にも、会社が1つまたは複数の商館、すなわち交易拠点を維持することを認めるものでした。[6]その見返りとして、スルタン・フセインは年5,000スペイン・ドル、トゥムンゴンは年3,000スペイン・ドルの支払いを受けることになりました。[7]

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

条約には、保護と排他性に関する規定も含まれていました。スルタンは外敵から会社を守ることを約束し、会社は外部からの攻撃に対する援助を約束しましたが、内紛には関与しないこととされました。両支配者は、他のいかなる国とも条約を結ばず、他のヨーロッパやアメリカの勢力の居留を認めないことに同意しました。[8]1819年2月6日は、近代シンガポールの公式な建設日とされています。[9]

この取り決めの法的性質は強調しておく価値があります。1819年の条約は、島の主権も所有権も移転していません。会社に与えられたのは、マレー人支配者の権威が存続する下で、交易拠点とその周辺の土地を設ける権利でした。トゥムンゴンはマレー人住民に対する裁判権と、一定の歳入の取り分を保持しました。居留地は、その起源においては、マレー国家内部の租借地だったのです。それがイギリス領へと転換するには、さらに1823年と1824年の2つの合意が必要でした。これについては次章で検討します。

オランダの抗議とイギリスのためらい

オランダは直ちに抗議しました。スルタンにはオランダの同意なしに領域に関する権利を付与する権限がないと主張し、イギリスの撤退を要求したのです。[10]ペナンでは、新しい居留地を競争相手とみなした総督が、ラッフルズもファーカーも支援しませんでした。カルカッタとロンドンでは、会社の取締役とイギリス政府が、居留地の価値とオランダとの争いのリスクとを比較衡量していました。[11]

オランダの公文書館における近年の研究によれば、1820年から1823年にかけての交渉の中断期間に、オランダの立場は変化しました。オランダの交渉担当者アントン・ラインハルト・ファルクは、シンガポールをイギリスから他の譲歩を引き出すための交渉材料とみなすようになりました。そして、シンガポールを手放してもオランダ帝国にとって実質的な損失にはな

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

らないと結論づけたのです。[12]次章で検討する1824年の英蘭条約は、シンガポールをイギリスの勢力圏に移し、ジョホール・リアウ世界の分割を承認しました。[13]

外交官たちが交渉している間にも、居留地は成長を続けました。ヨーロッパ列強がこの問題に決着をつけた頃には、シンガポールはどちらの側も容易に覆せない商業上の既成事実となっていました。ラッフルズはこの力学を理解していました。1819年6月10日の書簡で、彼は居留地の目的を、後にそのモットーとなる言葉で記しています。「我々の目的は領土ではなく交易である。偉大な商業の集散地であり、今後の状況が求めるに応じて政治的に影響力を広げうる支点である。」[14]

商館から主権へ

1819年の条約は、居留地の法的地位を不確かなままにしていました。会社は交易拠点を保有する一方、マレー人支配者は裁判権と歳入への請求権を保持していました。会社の区域外の土地は、引き続き彼らの権威の下にありました。この取り決めは、土地に対する確実な権原と単一の法秩序を必要とする商人を抱えた、成長中の町にはふさわしくありませんでした。

1823年6月7日、ラッフルズはスルタンおよびトゥムンゴンと新たな合意を結びました。それぞれ月1,500スペイン・ドルと800スペイン・ドルの終身支払いと引き換えに、両者は裁判権と土地に対する権利を放棄しました。これにより、島はイギリス法の下に置かれました。[15]ジョン・クロファードが締結した1824年8月2日の友好同盟条約は、島を東インド会社に完全に割譲することで、この過程を完了させました。[16]これらの合意が財産、裁判所、法にもたらした法的帰結は、次章の主題です。

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

注

1. Wikipedia, “Founding years of modern Singapore”（2026年9月閲覧）：遠征隊は前日にセント・ジョンズ島に上陸した後、1819年1月29日にシンガポールに到着した。 ↩
2. Wikipedia, “Founding years of modern Singapore”（2026年9月閲覧）：集落は“150 people governed by the Temenggong, most of them Malays, with around 30 Chinese”で構成されていた。 ↩
3. Wikipedia, “1819 Singapore Treaty”（2026年9月閲覧）：1819年1月30日に暫定条約が署名された。 ↩
4. フセインは困窮した暮らしを送っていたリアウ諸島からシンガポールに迎えられ、条約署名の直前にスルタンとして宣言された。Wikipedia, “Hussein Shah of Johor”及びCarl A. Trocki, *Prince of Pirates*, Singapore, NUS Press, 2nd edition 2007, chapter 3参照。 ↩
5. Wikipedia, “1819 Singapore Treaty”（2026年9月閲覧）：当事者と署名者。条約は英語とマレー語で並記して作成された。 ↩
6. Wikipedia, “1819 Singapore Treaty”（2026年9月閲覧）：会社は“maintain a factory or factories on any part of His Highness’s hereditary Dominions”ことを認められた。 ↩
7. Wikipedia, “Founding years of modern Singapore”（2026年9月閲覧）：スルタンは“a yearly sum of 5,000 Spanish dollars, with the Temenggong receiving a yearly sum of 3,000 Spanish dollars”を受け取った。 ↩
8. Wikipedia, “1819 Singapore Treaty”（2026年9月閲覧）、相互の義務と、“enter into any treaty with any other nation … nor admit … the settlement … of any other power European or American”しないとの約束について。 ↩
9. Wikipedia, “Founding years of modern Singapore”（2026年9月閲覧）：この日付は“is recognised as the official founding of modern Singapore”。 ↩

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

10. Wikipedia, “1819 Singapore Treaty”（2026年9月閲覧）：オランダは、スルタンにはオランダの同意なしに領土を割譲する権限がないと主張して、この合意に異議を唱えた。 ↩
11. バナーマン総督の下でのペナン政府による新居留地への反対と、カルカッタおよびロンドンでのためらいについては、Wurtzburg, *Raffles of the Eastern Isles*及びNicholas Tarling, *Anglo-Dutch Rivalry in the Malay World 1780–1824*, Cambridge, Cambridge University Press, 1962参照。 ↩
12. Peter Borschberg, “Dutch Objections to British Singapore, 1819–1824: Law, Politics, Commerce and a Diplomatic Misstep”, *Journal of Southeast Asian Studies*, vol. 50, issue 4, December 2019（要旨）。 ↩
13. Peter Borschberg, “Dutch Objections to British Singapore, 1819–1824”, *Journal of Southeast Asian Studies*, vol. 50, issue 4, December 2019（要旨：1824年条約第12条によるシンガポールのイギリス支配への移転）。 ↩
14. ラッフルズからアデンブルック大佐への1819年6月10日付書簡。“Letters and Correspondences of Raffles”, *The History Makers*（samhistmakers）に引用（2026年9月閲覧）。この書簡はLady Sophia Raffles, *Memoir of the Life and Public Services of Sir Thomas Stamford Raffles*, London, 1830に収録されている。 ↩
15. Wikipedia, “Founding years of modern Singapore”（2026年9月閲覧）：1823年6月7日の合意。“judicial power and rights to the lands”の放棄と引き換えに“lifelong monthly payments of $1,500 and $800 respectively”。 ↩
16. Wikipedia, “Founding years of modern Singapore”（2026年9月閲覧）：クロファードが署名した1824年8月2日の条約により、シンガポールは“officially fully ceded to the East India Company”。首長たちはさらに一時金20,000スペイン・ドルを受け取った。 ↩

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

Disclaimer

This article is provided for general information only. It is based on publicly available sources as at its date of publication. These sources have not been independently verified against licences, regulatory registers or the records of the entities concerned. It is not legal, tax, financial or investment advice. Nor is it a recommendation to invest in, transact with or use the services of any entity mentioned. Law and regulation change frequently, so the content may be incomplete or outdated. To the fullest extent permitted by law, Dr Alexander Ressos and the publisher of SingaporeIQ exclude all liability for loss or damage arising from the use of or reliance on this article. Readers should obtain advice on their specific circumstances before acting or refraining from action.

Names and trademarks of the entities discussed belong to their owners and are used for identification only. Their mention implies no endorsement, affiliation or allegation of wrongdoing. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. Corrections and updates: contact@ressos.com.

© 2026 Dr Alexander Ressos. This article may be quoted with attribution to SingaporeIQ (SingaporeIQ.com). Reproduction in full and any commercial use require prior written consent. The Legal Terms at https://singaporeiq.com/legal-terms apply.

Author contact: Dr Alexander Ressos, TEP · contact@ressos.com